説教20210829申命記4：1-9マルコ7：1-8，14-23

「心中に去来すること」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

私たち人間が救われることの要件とは、いうまでもなく、イエスキリストを信じて、洗礼を受けて、イエスキリストと共に歩むようになることです。私たちが救われることの要件とは、お金持ちになることでも、結婚することでも、又病気が治ることでもありません。

　キリストと共に歩むということを、今日は少し別の言葉で表現したいと思います。聖書には載っていませんが、キリストと共に歩むということは、キリストと心が触れ合っている、キリストと私の心が触れ合っている、ということです。いかがでしょうか、これは今の私の心が感じる実感から生まれた表現ですが、心が触れ合っている相手との思い出や関係は永遠のものである、と思われる方も多いのではないでしょうか。その様に、キリストと私たちも、心が触れ合う日々を重ねることによって、キリストとの関係は永遠のものへとなっていくのでありましょう。

キリストと心が触れ合っているという表現は聖書にないと、申し上げましたが、それはその通りなのですが、そういう意味のことは随所に見出せます。例えば今日の聖書箇所、申命記4章7節「いつ呼び求めても、近くにおられる我々の神、主のような神を持つ大いなる国民がどこにあるだろうか。」とありますが、いつ呼び求めても、近くにおられる我々の神というのは、近くにいて心触れ合うキリストということでありましょう。

　又、今日の申命記には、9節「ただひたすら注意してあなた自身に十分気をつけ、目で見たことを忘れず、生涯心から離すことなく、子や孫たちにも語り伝えなさい。」とも記されています。ここにある、生涯心から離すことなくということも、キリストと共に心触れ合って歩んでいきなさいということでしょう。

　聖書にある語句を、このように時には自分の言葉で言い換えてみるということも大事かと思います。それこそ、そうすることによって私たちとキリストとの心の触れ合いは、いや増して来ることでしょう。

　さて、キリストと私の心が触れ合っている、ということは、それによって常に私のけがれた心が清くされ、守られていくことになり、それで私は救われているのです。しかし、その救いの道というのは同時につらい道でもあります。私たちの心中にある全ての思いはキリストに知られています。いいことも悪いことも、心の奥底に隠そうと思っても、全て、キリストはお見通しなのです。そういうキリストと共に、心を触れ合いながら歩んでいくのは、常に自分の抱える罪をあぶり出されていくつらい道です。しかし、キリストは正義の神であるとともに憐れみの神でもあります。私たちが抱える罪を御前に告白し、それを心から懺悔して、悔い改めるとき、キリストは私たちを赦して、又新たなる救いの道を備えて下さるのです。

今日のマルコ福音書の箇所には、私たち人間の心が、もともとキリストと触れ合うのにふさわしくない、けがれたものであることを記しています。7章21節から、「中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い、盗み、殺意、姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである。」

牧師や伝道師は、こういった悪徳について語るとき、それを自分ごととして語らねばなりません。もともと罪深く語る資格のない者たちが語る訳ですから、語るものは、完全に自分の罪をキリストに告白し赦されてからでないと語ることは出来ないでしょう。今日のこの聖書箇所を語っていくというのも、又つらい道であります。私たちは聖書を読むとき、今日の聖書箇所でのような、人間の汚れや罪、悪徳をも直視するようにさせられるでしょう。それはつらいことですが、又、同時にキリストとの触れ合いによって、私たちの心の汚れが清められていく、救いのみちでもあります。

　さて、ここで聖書に記されている汚れということについて確認しておきたいと思います。汚れに関して、汚れた手、つまり洗わない手で食事をする者、などと記されていることから、私たちは、この汚れということを、ばい菌の様な物と誤解しがちですが、そうではありません。この汚れというのはウィルスや細菌などではありません。この汚れというのは、人間が持つ罪、悪徳のことであります。今日の聖書箇所を理解するには、先ずそのことをはっきりさせておくことが大事です。この汚れは、外から人の体に入るものではなく、人の中から出て来るものである、まさにその通りではないでしょうか。このように、今日の聖書箇所で、イエス様は、私たちが各自の心の中に潜めている汚れを、外に出して他の人になすりつけることはできないことをはっきりと言われているのです。言葉を変えれば、私たちは自分の罪を、他の人に責任転嫁して救われることは決してないということです。イエス様は、その様なことをしてきたファリサイ派の人々や律法学者たちを前にして、彼らを徹底的に非難されています。彼らは偽善者であり、『この民は口先ではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。』と。彼らの心は私から遠く離れていて、触れ合ってはいないのだとイエス様は言われます。だから、彼らは汚れに対して、昔の人の言い伝えを固く守って、念入りに手を洗ってからでないと食事をしないといったことを頑なに守っているけれども、そんなことをしても汚れに対して何の役にも立たないのだと、イエス様は言われます。そしてその様な人間の言い伝えばかりを大事にして、神のおきてをないがしろにしている彼らの罪を厳しく問いただしているのです。ファリサイ派の人々や律法学者たちが偽善者であることの真骨頂は、5節「なぜ、あなたの弟子たちは昔の人の言い伝えに従って歩まず、汚れた手で食事をするのですか。」という、人に罪をなすりつけ様とする発言に現れています。彼らは、自分の罪のことは思わず、自分は正義であると信じ込んで、このように民衆に対して発言をするのです。つまり、自分のやっていることが分かっていないのです。この表現はまさに聖書に出てきますが、十字架上でイエスが「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」と言われたあのことであります。

　私は今日の聖書箇所を読んでいてモラルハラスメントということを思わないではいられませんでした。今日における偽善者とは、モラルハラスメント、通称モラハラの加害者のことではないでしょうか。モラハラの加害者は、自分の罪のことは思わず、自分は正義であると信じ込んでいる人たちです。今の世の中では、職場であれ、学校であれ、家庭であれ、モラハラに巻き込まれて苦しんでおられる方々が、多くおられます。偽善者と言いますと、何か、よい行いをこれ見よがしに行う人であり、その嘘はすでに見破られてしまっている、という分かりやすい感じですが、モラハラの加害者の場合はそうではありません。彼らのつく嘘は、簡単に見破られる物ではありません。その理由は、彼ら自身がその嘘を真実であると信じ込んだ上での嘘であるからです。近頃よく、付き合っていたころは優しくて理想的な彼氏であったのに、結婚してからは、豹変して、心がぼろぼろにされるという話を耳にします。このような事態の深刻さを考えますと、ファリサイ派の人々や律法学者たちの偽善者としての姿は、今の私たちが思い起こす処のモラハラの加害者の姿に近いのではないかと思えてきます。ともかくも、よく聖書で語られます偽善者という者の姿には、その様な深刻な事態が宿っているということを、私たちは覚えておきたいと思います。

さて、ファリサイ派の人々や律法学者たちが遵守していた、昔の人の言い伝えとは、「口伝律法」とも呼ばれ、それは法律であり、人々の生活をしばりつける重いものであります。

「口伝律法」は人々一挙手一投足をも縛るものでありました。その一端が4節に記されています。「また、市場から帰ったときには、身を清めてからでないと食事をしない。そのほか、杯、鉢、銅の器や寝台を洗うことなど、昔から受け継いで固く守っていることがたくさんある。――」このような生活の細部にわたる、決めごとを決めておいて、それを守れるか守れないかで、救われるか救われないかを判断出来るということ。、、まさに「口伝律法」によって生きる生活とは、こんな迷信を信じ込まされて生きていかざるを得ない生活だと言えましょう。が、今を生きる私たちが、そんなことは昔の迷信深い時代の話で、現代には関係のないこと、として片づけることが出来るでしょうか。ひょっとしたら現代にもこの「口伝律法」と似た迷信の生活が縷々として営まれてはいないでしょうか。

イエス様は言われます。「人から出て来るものこそ、人を汚す。中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。」つまり古今東西どこに行っても、汚れというものは、人間の心の中から出てくるのであり、それは他に責任転嫁出来ることではないとイエス様は言われます。だから、今に至るまで、人間の空しい言い伝えは継続しているのです。　　では、その空しい人間の言い伝えを、私たちが断ち切るにはどうすればよいのでしょう。それは冒頭で申し上げました通りイエスキリストを信じて、洗礼を受けて、イエスキリストと共に歩むようになることです。イエス様と心を触れ合いながら生活をしていくということです。そういう生活の中で、私たちは、人の善い行いに魅了されてしまって、だまされるということがなくなっていくことでしょう。人の行いにばかり気を取られて、人の心をみないようになる時、私たちは人の行いの一つ一つに翻弄され、そこに悪意が宿るとき、私たちは聖書にしるされた悪徳を行ってしまうことになるでしょう。

このことを今日、イエス様は容赦なく私たちに戒められています。それは申命記の言葉を用いるならば、常に私たちの近くにおられる神が、私たちに授けられる律法を、私たちが生涯心から離すことがないようにするためです。今日の申命記の箇所の最後、9節をもう一度読みましょう。「ただひたすら注意してあなた自身に十分気をつけ、目で見たことを忘れず、生涯心から離すことなく、子や孫たちにも語り伝えなさい。」この、ただひたすら注意してあなた自身に十分気をつけ、という表現にことの重大さがにじみ出ています。そして私たちはこの重大なことを子や孫たちなど次の世代にも語り伝えなければなりません。

今は、イエス様と共に歩む時代に入っていますので、私たちはイエス様と心触れ合いながら共に歩んでいけば良いのですが、それでもなお、偽善者の姿を語り継いでいくことは困難である様に私には思われます。思い返せば、モラハラという言葉自体が誕生したのが今から20年ほど前の西暦２０００年前後であり、それまでは、人々は自覚もないままにモラハラの罪にまみれていたのでした。しかしその様な私たち人間の絶望的な状況から救い出して下さるのも、又イエス様であります。

今日は、悪徳表を聞かされるという、私たちの耳には痛い話でありましたが、これによって私たちのイエス様にすがる信仰が増し加えられ、イエス様によってこそ、私たちの心が清められることに感謝して、又、新たな生活へと歩みだしていきたいと願います。

祈ります

天の父

私たちは、悪いことをするとき、それを人のせいにするという、分かっていない者たちです。どうか主よ、私たちを御子とともに歩ませ、御子と常に心触れ合わせてください。

私たちが責任転嫁することの罪に陥ることから守ってください。私たちの汚れの源でもある私たちの心を清め守ってください。

私たちが死の影の谷を歩むときも、どうか私たちの心を守ってください。あなたからの戒めを心に刻ませ、それを行うものへとならせてください。今の世にあって心が折れてしまうような出来事が次々に起こりますが、どうか主よ、おのおのの心を清めて、私たちがよい行いを続けることが出来るように励まし導いてください。

ことに、今希望を見失っている若者や子供たちに、あなたのまことの救いを告げ知らせていくことが出来ます様、私たちを導いてください。

父と聖霊と